同朋選書 42

生死出ずべき道

和田 稠

目　次●生死出ずべき道

生死出ずべき道――1

第一講　本当の生を求めて――3

お彼岸を迎えて／「刹那の生死」と「一期の生死」／生死無常のことわり／後世のいのりに貫かれた生涯／そのかみの聖の胸を／「いのち」は私のものではない／生きている実感が出てこない／現代を生きる空しさ／雑行を棄てて本願に帰す

第二講　いのちの要求――31

なにごともみなわすれて候う／この身今生において度せずんば／なぜ仏法を聞くことに白けるのか／いのちの呼びかけに引き出され／宗教心は私の思いではない／往生の心が起こる時／南

生死出ずべき道

無阿弥陀仏は人間誕生の宣言

第三講　今、ここで目覚める――59

生と死を貫いて／苦悩の旧里は捨てがたく／思いが破れていのちに生きる／限りないいのち、果てのない光／如来とは目覚めしめるはたらき／信心の智慧が開く／限りなく覚め続け、生き続ける／御恩報尽の念仏とは／言葉はいのちの叫びである

真宗の学び――91

仏法を学ぶとはどういうことか／「わかる」ではなく「遇う」／身体全体を通して響いてくるもの／『大無量寿経』の教え／文字をもしらぬいなかの人々／どのような学びになっているか／遇いがたいものに遇った感動／教えを失った孤独の時代／教えを聞くことの意味／真宗と「教育勅語」との違い／真宗門徒がどこにもいない／今ここで往生がはじまる

あとがき――133

京都・高倉会館「彼岸会講座」（二〇〇四年九月二十～二十二日）の講義録より

第一講　九月二十日
第二講　九月二十一日
第三講　九月二十二日

第一講　本当の生を求めて

お彼岸を迎えて

この頃、「彼岸」という言葉があまり聞かれなくなりました。暦を見ますと、「お彼岸」ではなく「春分の日」「秋分の日」と書いてございます。今はお寺などだけで、「お彼岸」という言葉が使われているような感じがいたします。

その「彼岸」という言葉を聞くだけで、何か懐かしい思いを禁ずることができません。「ああ、今年もまた今日までいのちがあったなあ」という感じでござい

ます。

今年の夏は、例年になく暑い日が続きました。私の住まいは石川県ですが、北陸におりましても、毎日毎日、老体にこたえるような、喘ぐような毎日を送っておりました。早く涼やかな日が来ないかなあ、来ないかなあと思っておる間に、いつの間にか朝晩、涼やかな日を迎えるようになりました。

春秋の彼岸を繰り返し、繰り返し今日まで生きてきました。そのつど、「よくここまで生きておったなあ」と、現にそのなかを生きておることの不思議さを思います。

私は、今年八十八歳になりました。十二月になりますと八十九歳になります。ですからこれまで、一年二回のお彼岸としまして、百七十回ぐらいお彼岸を送り、迎え、送り、迎えてきました。春になり秋になり、お彼岸を迎えるたびごとに、つねに自分の人生を振り返り、まだ来ない先を思いやる。そういう生き方を重ねてまいったわけです。

今日は、そのお彼岸の講座に出てこいというお召しをいただいて、「生死出ずべき道」という講題を出させていただきました。

「刹那の生死」と「一期の生死」

「生死」とは、生と死という意味ではございません。生を離れて死はない、死を離れて生はない。「生死」という一つの言葉ですね。

仏教の上で、「生死」という言葉がどのように使われているかということを少しばかり調べてみました。そうしたら、「生死」というのは、「刹那の生死」と「一期の生死」という意味があるということが書いてございました。刹那というのは仏教の言葉ですが、ご存じのように、極めて短い時間のことを刹那と言うのですね。刹那とは「一瞬間の七十分の一」などと言われています。どこからそういう計算が出たのかはわかりませんけれども、極めて短い時ですね。

「刹那の生死」ということは、言うならば、私の生きている一息一息が死につつある。死につつある今を、一息一息生きつつある。そういう人生を送っておるという意味があるようでございます。それを「刹那の生死」と言います。私たちは健康な身体で生きておるということを当たり前のように思っておりますが、実は一息一息が死につつあるのですね。

お聞きのように、私の声が最近出にくくなりました。お聞き苦しいだろうと思いますが、いつの頃からかわかりませんけれども、だんだん声が出にくくなりました。死につつあるのです。耳がほとんどもう聞こえません。これも毎日毎日死につつあるのです。最近、目もだんだん見えなくなってきました。細かい新聞の記事が読みにくい。この頃はだんだん、大きな見出しもはっきりしなくなりました。目がもう死につつあるんです。毎日毎日、一息一息、死につつあるのです。

その死につつある一息一息を今、現に生きつつある。生きつつあるということと、死につつあるということが離れない。そのかけがえのない一息一息を、今こ

うしてみなさん方とお目にかかっておるわけです。

そして、やがてそのような生死を積み重ねて、五十年、六十年、七十年という生涯を終えて、一生を終わります。その生まれてから死ぬまでの一生、それもひとつの「生死」ですね。それを「一期の生死」と言います。「刹那の生死」を積み重ね、積み重ねて、そして、生涯を終わって「一期の生死」が終わる。そういうことを教えてもらいました。

生死無常のことわり

仏教ではそのことを、「生死無常（しょうじむじょう）」という言葉で表されております。生きておるということは、一息一息死につつあるということ。死につつあるということが、今毎日生きつつあるということ。一瞬の間も休む暇がない。留まるところがない。つねに死につつ生きつつ生きておるという、そういう緊張した生き方。そ

れが、私どもが現にここに生きておるという事実なんです。そういうことを示しておる言葉ですね。

そういうなかで、お彼岸の集いにお召し出しをあずかりました。

このお彼岸というのも、さっき言いましたように、一年に二回ずつ、「ああ春だなあ」、「ああ秋だなあ」と、生きていることの思いを新たにする、そういう日でございます。その日にお召し出しをあずかりました。私の「一期の生死」の最後に近い日、晩年です。その晩年に、思いもかけず、こうしてみなさん方とお目にかかるという機会をいただいた。おそらく今日のこのみなさん方との出遇(であ)いが、私の一生涯の最後の機会でなかろうかと思います。考えてみますと、まことにお名残りおしゅう、大事な時を与えていただいた。そういう感じを、今ひしひしと感じております。

二度と再びない時を、今日こうしてお目にかかれるという時を与えていただいた。おそらくそれが、私の「一期の生死」の終わりの近い、そういう日になるに

違いないということを思います。そういうことを教えられますと、これまで何ぞげに生きておりましたけれども、何か身の引き締まるような感じがいたします。そういう時を、今ここにみなさん方と共にしているわけでございます。

生きておるということは、毎日同じようなことを繰り返しているように思っておりますけれども、一日一日が新しいんですね。一日として同じ時を繰り返すことはない。次から次から、新しい生死を繰り返していく。そういう留まることのない毎日を生きているということでございましょう。

考えてみますと、一日一日が新しい日であって、同じ日が二度とない。そのようなかけがえのない時を、こうしてここでお遇いしておるということでございましょう。

しかし同時に、一刻として同じ時がなくて、次から次からと新しい時を迎え、そしてやがて生涯を終わっていくんだということになりますと、何かそれだけではもうひとつ、くっつり（満足した気分を表わす石川県の方言）こないというこ

とがございます。今、現にここに生きているという、かけがえのない実感がない。言いますならば、「われ、今ここにあり」と言えるくらい、地に足のついた確かな生き方というものが、もうひとつはっきりしない。一生懸命、それぞれ生きているんだけれども、それが瞬く間に過ぎ去っていってしまう。これという確かな生涯がつかめないまんまで、終わりの日が限りなく限りなく近づいてくる。そういうことですね。そのことを「生死無常」という言葉で聞かされてまいりました。

まったく、すべてのものが瞬時も留まることなく移り変わり、移り変わり、新しい死と生とを迎え、やがてわが生涯が終わっていく。そういうことを特にこの頃身に滲みて感ずるわけでございます。

後世のいのりに貫かれた生涯

さて、「生死出ずべき道」とは、みなさんご存じかとは思いますが、親鸞さま

の妻である恵信尼さまが、親鸞さまがお亡くなりになった後、お手紙のなかに書かれた言葉です。

親鸞さまという方は、一二六二（弘長二）年の十一月二十八日に、九十歳の生涯を終わられました。いったいこの親鸞さまの九十年の生涯は何であったのかと考えてみますと、それは一口に言えば「どうしたら、生死出ずべき道が見つかるか」ということで貫かれておったということが書かれておるわけです。

生死とは、「死につつ生きつつある」「生きつつ死につつある」という、それはかけがえのない時でございますけれども、そこには「本当に私は今ここに生きておるんだ」という確かな実感がない。その本当の生を求めずにはおれない。ただ生涯を繰り返して、終わりの日が来るのを待っておるというだけでは頼りない。今ここに私は生きておるんだという確かな生き方を獲得せずにはおかない。その確かな生き方を「後世」「後生」という言葉で言い表しておるわけでございますね。

毎日、「一期の生死」「刹那の生死」を繰り返しながら、本当に今ここに生きておるんだという確かな生を生きたい。その確かな生が獲得されない限り、私の生涯はまったく意味がない。その願いを「後世のいのり」と言います。

恵信尼さまのお手紙には、「親鸞さまは生涯にわたって、後世のいのりを貫いて生きていかれた」と、こういう意味の言葉が書かれてございます。

これこそ確かな生き方だということを、身に応えて生きてきた覚えがない。その時その時、一生懸命生きてきたように思っておるけれども、振り返ると何も残っていない。何も残っていないけれども、そのままでおさまらない、何とか、確かな生涯を獲得したいという願い。その願いが、またしてはまたしては沸きあがってくる。それを「後世のいのり」という言葉で言われています。よい言葉ですね。

われわれがこの場所に来ておるのも、「後世のいのり」に押し出されてここへ来ておるということです。本当の生き方がどういう生き方であるかがはっきりしない。はっきりしないけれども、それは「後世のいのり」となって現に私たちをここへ呼び寄せている。そういう意味合いがございますでしょう。そのことを思いますと、私は何とも言えない切ない気持ちになるわけです。

そのかみの聖の胸を

京都へ出てまいりますたびに、思いを新たにすることがございます。それはどういうことかと言いますと、京都に来ますと、必ずご本山（東本願寺）のお朝事にお参りすることにしております。そうして御影堂の廊下から遠くのほうを見ますと、比叡山がそびえて見えております。私が青年時代に仰いだ比叡山と、今朝も遠くの空にそびえている比叡山……。何でもないようですが、その比叡山を思いますと、何か私は胸が迫るような切実な思いがいたします。

あの比叡山で、親鸞さまが九歳の時から二十九歳まで丸二十年間、本当の生を